

# 第2版の序

2015年、第1版が出版されてから7年が経過した。この7年の間に理学療法士作業療法士学校養成施設の指定規則が改正され、特に臨床実習にかかわる部分に手が増えられた。なかでもクリニカルクラクシップの功罪を考えると、新卒者の臨床力、問題解決能力の視点から心配は尽きない。医師のクリニカルクラクシップは、免許取得後の研修期間が前提となっている。理学療法士の場合、これが十分だろうか。志の高い新人は、高額の出費のもと、休日返上で講習会、学会で自己研鑽を積み、そうでない者の技術水準は全く進歩しない状況は以前からあったが、実臨床において最低限担保すべき水準が低下しているのではないかと危惧している。ケーススタディにおいて、「統合と解釈」という肝心の部分を自ら書く経験がないまま、いきなりプロとしての仕事を求められる新人は苦勞していないだろうか。

「なぜ転倒するのか?」「なぜ歩きにくいのか?」この一見単純な問いに多くの要素が含まれている。“観察”→“分析”→“仮説立て”→“介入”→“再観察”。このプロセスの繰り返しこそ、患者の機能回復につながるだけでなく、理学療法士自身の成長にも役立つ。しかし、優秀な指導者に恵まれ、たっぷり治療期間もあった私自身が病院に勤務していた年代とは異なり、修得すべき事柄が多い今の世代の人たちは本当に大変だと感じる。また、情報過多の現状も、どれが頂上につながるかわからない山道が多くあるような印象がある。この問題の解決には地図と磁石を使いこなせるようになるしかない。理学療法士の地図と磁石は、解剖学、生理学、運動学の知識と観察技術である。

日頃教鞭を執っていて、学生たちの観察技術は比較的速く習得できていると感じる。知識と技術をある程度習得できれば、現象の分析、考察能力を高める速度も向上する。新しい技術を習得するために必要なものは、動機づけと繰り返し回数であることをわれわれは知っている。第2版の出版にあたり、教科書として利用していただいている理学療法士養成校から、症例数の増加の要望が出たことも納得がいく。

学生諸君には、ぜひ全症例の「統合と解釈」をまとめることにチャレンジしてほしい。幸い、本書には動きと力に関する正解が載っていて、ベテランによる模範的な治療法も書かれている。本書の姉妹編とも言える『理学療法のための筋力トレーニングと運動学習（羊土社）』は、基本的な運動療法を学生向けに詳しく解説しているので、治療プログラムの立案では、合わせて参考にさせていただきたい。

さらに、教科書としての利便性を高めるため、関連する国家試験問題を追加した。学修成果の確認に利用していただきたい。

本書に触れるすべての方のスキルアップと知識が深まることに役立つことができれば、無上の喜びである。

2022年12月

畠中泰彦